

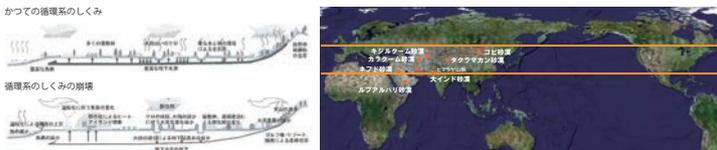
■ 富山県において砺波平野散居村の田園空間整備事業に携わりました。

「田園空間整備事業」は、農村地域の「水」と「土」を中心とする地域資源について、歴史的・文化的観点から再評価し、地域の活性化を図るとともに、その国民的活用を推進するため、農林水産省によって平成10年（1998）12月に創設されました。この事業で進められているのが「田園空間博物館」構想です。

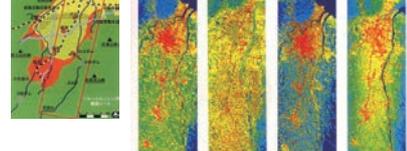
「田園空間博物館」の整備は、建物の中に展示する従来の博物館とは異なり、エコミュージアム活動にちなんで「地域全体が博物館」という思想に基づき、**地域住民の参加を得ながら田園空間を保全・活用していくこととする**ものです。その視点は、農村地域を単に生産を支える場としてとらえるのではなく、自然と人間が織りなしてきた農村の伝統文化や農業にかかわる地域資源におかれており、伝統的農業施設や農村景観などを展示施設とし、これらを田園散策の道で有機的に結ぶことが構想されています。具体的には下図のような整備が計画されています。

また、「田園空間の整備について」の中では、農村を歴史的価値のある田園として再評価し、「田園空間」を日本の伝統として残していく、それがこの事業で最も訴えたいところだとされており、パンフレットのイメージにもあるように、茅葺き農家群や棚田、石積み水路、伝統的ため池、古い堰、石碓・史跡などを保存整備し、「懐かしい田園風景の再現」「美しい農村景観の復元」といった価値観をこめたと構想が描かれています。

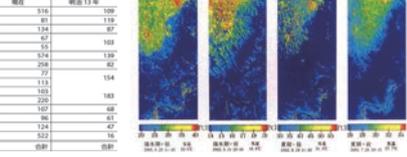
- 1) 地域の伝統的農業施設などの保全・復元  
かんがい用水路、ため池、堰等の復元・整備歴史的な水田原野の保全
- 2) 農村の伝統的景観の保全・復元  
農家群などの保全・復元伝統的な農村景観の保全・復元田園散策
- 3) 地域に残された空間などの活用  
棚田、水田、水田の活用農村の歴史・文化の継承
- 4) 農産品を生産した伝統的施設などの活用  
農産物の生産・加工施設の活用
- 5) 総合的な整備  
環境整備、情報発信、資料保存施設として総合的な整備



■ 環・日本海



環境省事務次官の中井徳太郎氏、松本零士氏らと設立したNPO法人



富山県+農林省構造改善局の仕事として、農業特に農村の創造的保全に関する仕事を6年以上取り組みました

地球の中の日本海

世界では急速な砂漠化が進行中ですが、森林伐採や二酸化炭素による温暖化など、人間活動に起因する環境変化がこれをさらに促進する要因となっています。世界地図を見ると、日本海沿岸部はゴビ砂漠などと一緒には北半球の砂漠バンド（緯度 20～40 度）に含まれていることがわかります。それでも日本海沿岸が砂漠化せずに豊かな環境を保っているのは、ヒマラヤ山脈や日本アルプス、日本海などの微妙な地理的バランスが影響しているためです。

ゴビ砂漠など世界中の砂漠は、日本の入っているゾーンに集中しています。だから日本人が日本海側の木をどんどん切れば、僕の生きている間は大丈夫だと思えますが、皆さんが老人になるころには危ないかなというくらいのスピードで砂漠化が進みます。鳥取に若干砂漠があるのは、気候の隙間で砂漠化が起きているためです。そういう中で日本海をどう守ろうかというのも、日本海学のテーマの一つです。

環境主義の生活

今のままの消費的な生活を続けていってはいつか資源は枯渇し、地球環境にも大きな影響を及ぼすことになります。私たちはもう一度身近な自分たちの住まい、暮らし、地域の伝統や文化を見直し、省エネルギーで環境負荷の少ない循環系の仕組みの理解、環境型の新しい技術の研究・開発が不可欠となるとともに、地域の人々がそのような意識をもってリサイクルや省エネルギー化に取り組んでいく必要があります。

<p>農村に対する都市的発想、農村の自然生態系や地域の歴史、文化に配慮した整備に転換する</p>	<p><b>日本</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・都市的土地利用（商業施設、工場、住宅団地等）の無秩序な拡大による農地の減少と顕在化した排水問題</li> <li>・生活の利便性を高めた道路の配置と広告の氾濫</li> <li>・生産効率を追求した園場整備とコンクリート水路</li> <li>・現代生活から見た屋敷林の存在価値の低下に伴う減少</li> <li>・生活しにくくなった伝統的家屋</li> </ul>	
	<p><b>ドイツ</b></p> <p>農地保全のための制度、ビオトープの考え方 居住区域と農地が区分され農地整備が行われるよう、規制・計画・実現の3つの手段が相互機能するように制度化されている。また、「園場整備と自然保護を同時に達成させる」というビオトープの考え方も生まれた。</p>	
	<p><b>フランス</b></p> <p>エコミュージアムの例 自然や文化遺産を、保存、育成、展示しながら教育の視点を持って行っていく総合的な地域づくりの方法。テーマ毎にデザインが統一されたパンフレットの出版やサイン計画、子どもの教育プログラムづくりも行われている。</p>	
	<p><b>イギリス</b></p> <p>ナショナルトラストの例 1985年設立、現在では27万ヘクタールの田園、920kmの海岸線、300箇所以上の保護資産を持ち、譲渡不能宣言権などにより法的に保護されている。また、資産の公開等により自主的な運営が可能になっている。</p>	
	<p><b>アメリカ</b></p> <p>環境アセスメントの例 1960年代にイアン・L・マクハーグらにより提案された方法。生態学的視点、社会的視点から選出された様々な要因のデータを重ね合わせ、最も効率的な土地利用を反映させた生態学的環境計画を行うことが可能になった。</p>	

日本海側の視点を取り入れることが重要だと考え、富山県を捉えなおす学問を始めました。

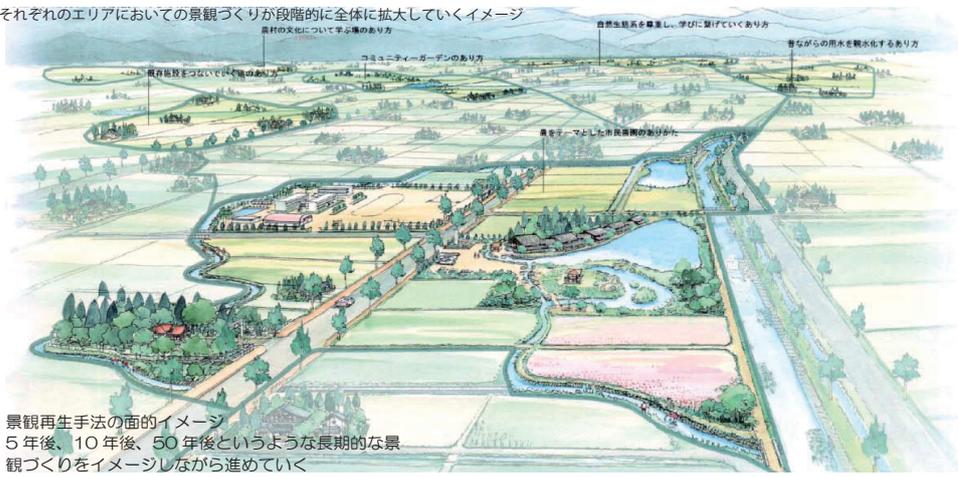
私は富山県農林省推進改善局と「創造的保全」という考えのもとに、富山県の日本海学というものの立ち上げに携わり、環・日本海というNPO法人を環境省事務次官の中井徳太郎氏（当時富山県に出向し、生活環境部長などを勤めていた）、松本零士氏らと設立しました。兵庫県は瀬戸内海、日本海に面しているため、日本海側の視点も重要だと考えます。富山県では私達の田園博物館構想そして景観条例の成立、それらの一連の動きが、日本海学という学問の体系を作るところまで発展し、東京大学教養学部の伊東先生やロナルド・トビ、北海道大学の小泉格氏、ニール氏などいろいろな人たちが参加しました。UNEP（国連環境計画）下のNOWPAP（北西太平洋地域海行動計画）の事務局が富山にあります。地中海や日本海などの閉鎖性海域は重要だということで、新しい学問を富山県が中心となって新しい学問を興しました。「環・日本海」というのは、環境省事務次官の中井徳太郎氏、松本零士氏などいろいろな人をつくっているNPO法人です。その中で私は散居村を例にとり、エコロジカルに風などをコントロールして生きる街を考えています。この人たちと一緒に中学生や小学生向けに環境問題の教科書をつくり、富山の子どもたちにただで配りました。その後、中井氏に呼ばれて、東京大学で建築ではなく日本海学を教えました。（当時中井氏が東京大学の教授職に就いていました）

砺波平野の住環境調査プロジェクト

東工大の梅干野教授と僕らで、人工衛星を飛ばして地面の温度を測ったら、アスファルトと農地で4℃違います。4℃下げるためには、1軒に9台のクーラーをつけなくては行けない。いま地球の温度の上昇を食い止めないと、砂漠化もどんどん進みます。僕らはこの地域で調査をして、農地などの住み分けをしながら何とかやれないかと言っていますが、個人の利権等いろいろあって難しいところがあります。

# ■ 砺波平野の景観づくりのイメージ

それぞれのエリアにおいての景観づくりが段階的に全体に拡大していくイメージ  
農村の文化について学ぶ場のあり方



景観再生手法の面的イメージ  
5年後、10年後、50年後というような長期的な景観づくりをイメージしながら進めていく

## ■ 風景をつくっていく方法



## ■ 散居村の風景の再生



**昔**  
昔の風景は、今と違って静かだった。散居村の風景は、自然の恵みと人の営みによって形成された。その風景は、地域の歴史と文化を伝える重要な役割を果たしている。

**現状**  
現在の風景は、開発の進捗に伴って変化している。自然の恵みと人の営みが失われつつある。散居村の風景は、地域の歴史と文化を伝える重要な役割を果たしている。

**これから**  
未来の風景は、自然の恵みと人の営みが再び活かされる。散居村の風景は、地域の歴史と文化を伝える重要な役割を果たしている。

## ■ 景観再生手法の面的イメージ

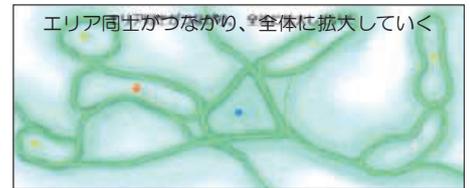
5年後、10年後、50年後というような長期的な景観づくりをイメージしながら、進めていく。



- 関連付けられる拠点の設定
- コア、サテライトの設定
- フットパスの設定



- 周辺環境における景観のルールづくり



- 周辺の保全エリアの設定
- 個々の地域資源（道、水路、公共施設、散居など）の景観ルールづくり
- より広域的な道（フットパス）の設定

地域のすばらしい資源も、個々に点在しているだけ（そこにあるだけ）ではその価値を十分に活かしてはいえない。地域資源（ひと、文化、産業、景観）を繋ぎ、地域の中に「流れ」を創り出すことが重要である。

### ■ 風景の戦略的創出（景観を繋ぐ）

美しい散居風景は観光資源の核となり、となみ野の住民の誇りともなる。

- 散居風景を眺めるためのしかけづくり  
展望ポイントのピックアップ（針伏山、展望台等）
- 観光ポイントの整備  
井波の彫刻、高岡の鋳物、となみのチューリップ、床川温泉等
- 屋敷林の新しい活用法の検討  
散居村を構成する修景としての屋敷林の整備  
外から眺めるだけでなく、中での生活を体験してもらうためのしくみ（宿泊体験、屋敷林オーナー制度、ボランティア維持管理等）
- 共生型インフラを整備（自然を育むやさしい技術と快適を創るハイテクのベストミックス）  
道路網・・・電柱の地中化、花木の草花を配した散策路  
水路網・・・新水性の豊かな水路の復元→動植物の生態系の回復  
情報網・・・観光情報の提供、地域住民の情報共有

# ■ となみ散居村ミュージアム情報館



復元棟

事務局棟

リフォーム棟

伝統的家屋に秘められた先人の知恵を、現代の人々に分かりやすく伝えます。

学問としてだけでなく、散居村の伝統を次世代に繋ぐ体験型ミュージアム機能を有します。会議、イベント、散居村に関する研究・学習から様々な体験まで有機的な利用が可能です。

かつて砺波平野で営まれていた、農業と密接な繋がりのある環境共生型の生活を、伝統的家屋に生活しながら子供達に伝え残します。

## 解体作業風景



① 家屋内の家具・床板・畳・襖・障子など取り出し

② クチザシキ・オクザシキ・ヒカエマの天井取り外し。枳の内・ザシキの壁解体

③ アマ・中二階間・枳の内回りの土壁取り壊し。台所・チャノマの天井取り外し

④ 中二階の土壁、ヘヤの壁、ヒカエマの小屋組み解体

⑤ 解体した木材の番付、トイレ・台所・風呂・台所・玄関・イマの壁解体

⑥ 床板を一部剥がし床下のチェック。内部土壁の解体ほぼ終了

⑦ 瓦の取り外し、外壁・エンの庇・屋根部分解体

⑧ 瓦の積み出し、エンの部材、下屋解体



既存の伝統家屋の「枳の内」と呼ばれる構造コアの部分を民間より譲り受けて、再利用しています。